



ちひろとちひろが愛した画家たち ●2009年9月11日(金)～11月30日(月)

協力:財団法人原爆の図丸木美術館、財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館、東京藝術大学

淡く優しい色彩で子どもを描き続けたいわさきちひろは、どのような画家に憧れ心躍らせていたのでしょうか。本展では、ちひろの作品と併せて、ちひろが愛した11人の画家の作品を紹介します。

ちひろが愛した画家たち

幼い頃、ちひろは、大正期の絵雑誌「コードモノクニ」に出会い、見開きいっぱいに美しい色彩で印刷された絵の数々に心躍らせました。「その本は今まで私が見てきた本とはまるで違っていった。

(中略) 見ることや考えることがたくさんあって、夢のようないい気持ちになった。(中略) 岡本帰一(図1)の絵が好きになり、武井武雄(図2)、初山滋(図3)の絵にあこがれた。」と語っています。髪に飾った大きなリボンや裾の広がったワンピースといった、当時、日本ではまだ馴染みの少なかったモダンなファッションや、妖精や小人が登場する世界……。 「コードモノクニ」が与えた夢は、ちひろの心に生涯残り続けました。

女学校時代には、雑誌の口絵で見た女性画家、マリー・ローランサン(図4)

の絵にも、強い憧れを抱いています。

「はじめてローランサンの絵を見たときは、本当におどろいた。どうしてこの人は私の好きな色ばかりでこんなにやさしい絵を描くのだろうか。」という言葉からは、白を基調につくられる桃色、水色、紫など、ローランサン特有の柔らかな色彩を愛していることがわかります。

ちひろが師事した画家たち

14歳のとき、母親の知人の紹介で洋画家・岡田三郎助(図7)に師事し本格的にデッサンと油彩を学び始めたちひろは、この頃、画家になる夢を持ち始めました。3年後、岡田が顧問を務めていた朱葉会の洋画展で入選を果たしています。

1942年、23歳のちひろは、第五回文展で中谷泰の「水浴」(図5)を目にし、「どうしても絵を教えてもらいたい」と、世田谷にあったアトリエに中谷を訪ね、その場で入門を許されました。ちひろは、中谷のもとで油彩を学び始めますが、その後、次第に戦局は悪化、絵を描くことなど考えられない状況になっていきました。

終戦後、ちひろは、生きる喜びとともに、絵を描く情熱を再び取り戻します。疎開先の松本市から東京へ戻り、新聞記者として働きながら、丸木位里・俊のアトリエで開かれていた人物デッサン会に参加しています。「間違えたからといってすぐに線を消してはいけない、自分が引く1本の線にも責任を持つ」という考えを、ちひろは俊から学びました。また、アトリエに通うなかで、ちひろは、伝統的な水墨技法を用いながらも、独自の表現を試みた位里(図6)の作品からも多くを学んだと思われます。

師事した画家たちのアトリエで学んだ経験は、「にじみ」や「ぼかし」による水彩技法や確かなデッサン力など、後のちひろの表現を支えています。

本展では、その他、ベン・シャーン、ケーテ・コルヴィッツ、オノレ・ドーミエの作品とともに、ちひろが描いた絵本や絵雑誌などの作品を展示します。さまざまな画家の作品を自身のなかで昇華し、ちひろが確立した表現の魅力をお楽しみください。(宍倉恵美子)

●展示室4

日本・ポーランド国交樹立90周年記念 ポーランドの絵本原画展 ●2009年9月11日(金)～11月30日(月)

後援:駐日ポーランド共和国大使館 協力:フィリア美術館、東京外国語大学附属図書館、東京都立多摩図書館

ポーランドはヨーロッパの東端に位置し、18世紀末に国土を分割されたため、20世紀初めまで国家を失うという悲劇的な歴史をもつ国です。第二次世界大戦でもロシアとドイツに国を挟まれ、多くの被害を受けながらも廃墟から立ち直り、戦後は社会主義国となりました。1950年以降、国内のすべての出版活動は国有化され、子どもの本の値段も、誰もが手にできるよう安くなり、発行部数も戦前の8倍に伸びました。美的、教育的観点から、子どものための本には力が注がれ、専門の出版社も成長しました。

特に1960年代は、出版点数を増やした絵本に自由な表現を求め、ポスターや絵画、建築等、異なる芸術分野からも力のある人たちが集まりました。海外の絵本原画コンクールやブックフェアでも活躍が目立ち、「ポーランド派」とも呼ばれるほどでした。しかし、1970年代半ばから経済状況が悪化し、絵本をとりまく環境も厳しくなりました。1989年に国は民主化され、状況は大きく変わりましたが、1960年代、1970年代に活躍した画家たちや出

版された絵本は、その後のポーランドの絵本界に少なからぬ影響を与えました。

本展では、社会主義の時代から絵本の世界で活躍し、現在も制作を続けている絵本画家3人の作品を中心に、9人による約70点の作品を紹介します。

ユゼフ・ヴィルコンは、海外でも多数翻訳出版されている絵本画家です。クラクフで美術史と絵画を学び、現在は首都ワルシャワの郊外にアトリエと住居を構えています。初期の水彩で描かれた作品には、色の実験とも思える繊細かつ自由な色面が、詩的な味わいを醸し出しています。後期になると、パステルを用い、やわらかなタッチと色のコントラストで、得意な動物や自然を描いています(図1)。1990年代からは、木や金属を用いた立体作品も積極的に制作し、新たな境地を開いています。

ボフダン・プテンコは、ワルシャワでグラフィックを学び、絵本を中心にポスター、アニメーション映画なども手がけてきました。シンプルなきどらない線で描かれる登場人物たちは、ユーモラスで

読者に親近感を与えます(図2)。プテンコは「本の建築家」とも呼ばれ、レイアウトから書体まで、遊びのある本作りを得意としています。

エルジュベータ・ガウダシンスカは、ワルシャワで絵画とテキスタイルデザインを学び、1974年に最初の絵本を描きました。彼女の絵は、前景の人物と遠景の景色の大胆な対比や、なめらかな曲線でデフォルメされた人物・動物が特徴的です。抑えられた同系色が使われ、どこか古典絵画を思わせます(図3)。

他にも、ポーランドで唯一のアンデルセン賞受賞画家Z.リヒリツキ(図4)、深い色調の絵のA.ボラティンスキ(図5)、勢いのある筆づかいのJ.グラビャンスキ、激しい色と線を使うE.ムラフスカ、大胆な造形を行なうT.ヴィルビク、リトアニアから移住し、現代美術でも活躍するS.エイドリゲビチユスの原画とともに、1960年代以降のポーランドの絵本を展示します。

知られざるポーランド絵本の魅力を、お楽しみください。(松方路子)

ちひろが愛した画家たち

岡本帰一

図1 月夜の精 (印刷物)
1920年代

武井武雄

図2 人形の夢
制作年不明

初山滋

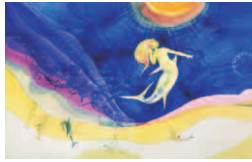


図3 『にんぎょひめ』より 1967年

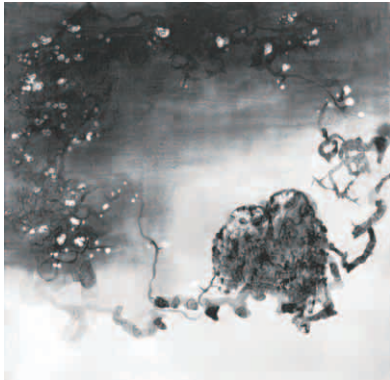
マリー・ローランサン

図4 ブリジット・スールデルの肖像
1923年頃 ©ADAGP, Paris&SPDA, Tokyo, 2009

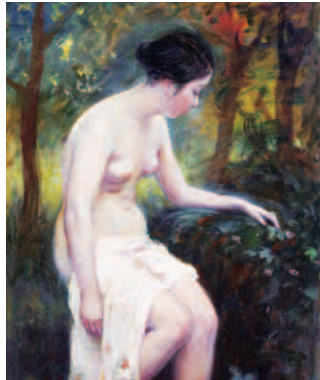
中谷泰

図5 水浴 1942年
東京藝術大学蔵

丸木位里

図6 ふくろう 1945年
個人蔵 協力：原爆の図丸木美術館

岡田三郎助

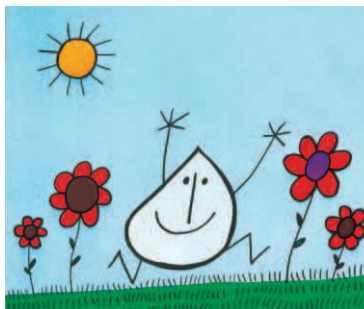
図7 裸婦 1936年
ポーラ美術館蔵

いわざきちひろ 花を持つワンピースの少女 1969年頃



いわざきちひろ『ゆきのひのたんじょうび』より 至光社 1972年

●展示室4

図1 ユゼフ・ヴィルコン (1930~)
『ブラウソンのねこ』より 1987年図2 ポフタン・ブテンコ (1931~)
『しずくのぼうげん』より 1965年 作家蔵図3 エルジュベータ・ガウダシンスカ (1943~)
『マーティンとおそろしいどろぼう』より 1987年図4 スピグニエフ・リヒツキ (1922~1989)
『ごぐまのミーシャ』より 1982年
フィリア美術館蔵図5 アンтони・ボラティンスキ (1930~)
『不思議な島』より 制作年不明 フィリア美術館蔵

ちひろを 訪ねる旅③

渋谷区伊達町・
岡田三郎助の画塾



朱葉会洋画展入選者を祝う茶話会にて
(1936年5月)
前列右端が、いわさきちひろ(17歳)
その左後ろには、右から小寺健吉、藤田
嗣治、有島生馬の顔ぶれが揃っている。

いわさきちひろは、第六高等女学校の2年生、14歳のときに、母親の知人の紹介で、洋画家・岡田三郎助(1869-1939)の門を叩きました。当時のことをちひろは、「絵本の好きだった子は毎日絵を描いて遊んでいた。小学校は絵が上手な子で通った。女学校にはいっても絵がうまいとみんなにいわれた。女学校二年生の三学期、やっと母親は自分の子に絵の才能をみとめたか、岡田三郎助画伯の門を叩いてくれた。先生のアトリエに通って日夜デッサンにあけくれ、絵本のことはすっかりわすれた」と、記しています。

母・文江に伴われて岡田の家を訪ねたちひろは、持参した作品を

見せ、岡田に促されて数枚の絵を描いたところ、その場で、入塾が許されたといわれます。

岡田三郎助は、同郷の洋画家、久米桂一郎の紹介で黒田清輝と知り合い、大きな影響を受けます。1896年(明治29)に、黒田とともに白馬会洋画研究所を創立、後に、東京美術学校の教授となり、1912年(大正元年)には、藤島武二本郷絵画研究所を設立。自邸には、女子美術研究所を設け、男女を問わず、後進の育成に努めました。ちなみに、妻の八千代は、築地小劇場を創設した小山内薫の妹で、妻の父方の従兄弟には、藤田嗣治がいました。

当時、ちひろの中目黒の自宅か

ら伊達町の岡田の自邸までは、東に歩いて数キロと近く、アトリエに通っては「日夜デッサンにあけくれた」というのもなすけます。画塾には、デッサン室と油絵室があり、デッサンと油絵画といったカリキュラムが組まれていたようです。後にちひろは、岡田からデッサンの大切さと、紫色の使い方、特に陰影に紫を用いる表現を学んだと語ったといえます。

岡田の画塾からは、三岸節子や深澤紅子らが出ています。また、満州国最後の皇帝、愛新覚羅溥儀の弟、溥傑のもとに国策として嫁いだ女性、18歳の嵯峨浩も、ちひろと同じ時期、この画塾で絵を学んでいました。(竹迫祐子)

ひとこと ふたこと みこと



6月17日(水)

ちひろさんの子どもへの想い、平和への願い。子どもが産まれた今、心にぐっときます。

6月19日(金)

去年の今頃、夫と2人で初めて訪れ、ちひろさんの優しい美しい絵に感動しました。特に夫は“うわ～っすごい!!”を連発してしまうほどの感動ぶりでした。その夫が9月に亡くなってしまい、時々深い悲しみに陥り……。今日はあのとときの夫と味わった感動をもう一度かみしめたくて参りました。“いのちのバトン”を観ながらウルウル。再びこのような感動的な詩と心が洗われるような素晴らしい絵に触れることができ感激です。ありがとうございました。穏やかな気持ちで帰っていけそうで

す。自分のいのちを大切に生きていきたいです。(宮島ゆき子)

6月20日(土)

秋に嫁ぐ娘と夫と3人で岐阜から来ました。何度来てもいつも満たされた気持ちで幸福になれます。娘が幸福な人生を送れるよう、ちひろさんのようにやさしいまなざしで見守っていきたくと思います。

6月21日(日)

ちひろさんのあかちゃんとお母さんの絵が、とても愛しい感じがして好きです。もうすぐ出産予定の義姉に、絵本を贈りたいと母と話していました。安曇野は、家族で来る特別な場所です。今回は両親と一緒に来て、嫁入り前の旅行としては最後になります。今回ここに来られたことに、感謝したいと思います。(阿部紀子)

6月27日(土)

以前は“ぼやけた絵だなあ”(ごめんなさい)としか思っていなかったいわさきちひろさんの絵ですが、子どもをもって改めて見てみると“うちの子にそっくり!”とびっくりし、本当に子どもが好きなんだなあと伝わってきました。一枚一枚、瞳しかなかったりしても表情豊かで、なんだか涙が出てきてしまいました。(木山多美)

7月13日(月)

二度目の来館。8年前には感じなかったちひろさんの思い、優しさの深さ、そして女性として、母として妻として、いつも前向きにいっしょうけんめい取り組む姿勢を心の底から感じ取ることができました。今、私はちひろさんの亡くなられた年になりました。

美術館 日記



6月20日(土)☀

古きよき名画をお楽しみいただくchihiro cinema映画上映会。6回目となる今回は、『丹下左膳餘話(よわ)百萬兩の壺』を上映。お客様からは、「心の温まる映画」「極悪人がいなくて女性が強い」「思わず涙が緩みます」との声が。映画監督の河崎義祐氏(NPOシネマネットジャパン理事長)が当時の時代背景や出演者の裏話を語るミニトークは、「いつも楽しみにしています」とリピーターから人気。

7月1日(水)☁

少し遅咲きの紫陽花が、満開になった。毎日降り続けるスコールのような雨の中、近年まれに見る大きく多彩な花々に、記念撮影をされるお客様が多く見られた。紫陽花は、7月末まで楽しめる。

7月18日(土)☁・☀

いわさきちひろと日野原重明(聖路加国際病院理事長)の詩画集『いのちのバトン』の出版記念講演会が、松川村すずの音ホールで開催された。97歳の現役医師である日野原氏が「いのち一親と子の絆」について講演。終始、背筋をすっと伸ばした立ち姿で「ちひろさんの絵の中にある“命”を子どもに上手に伝えなくてはいけない。親子で読んで、子どもにバトンを渡して」と、約250人の観客に向けて、語りかけた。

7月19日(日)☁/☀

東京ドーム16個分の大自然を楽しめる国営アルプスあづみの公園が、前日の7月18日に開園。オープニング記念として、18~20日の3連休は無料開放された。安曇野

ちひろ美術館からは、車で約10分。三連休中日で、美術館も国立公園園帰りのお客様でにぎわった。子どもがうれしそうにシデロイホス(原田和男作の鉄器)を叩いていたのが印象的だった。

7月29日(水)☁

サマープログラム「ちひろの水彩技法体験」が、NHK長野放送局から生中継された。このワークショップの特徴は、地元松川中学校の生徒が、ボランティアで会場をサポートしてくれること。ボランティア登録者は年々増え、171名となった。今年は「なつのいろをさがそう!」がテーマ。早速お客様から「TVでやってるのを見た!」「これを楽しみにして来ました!」という声が聞かれ、子どもからも大人からもうれしい反応が。

安曇野館イベント予定

各イベントの予約・お問合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。
 詳細・最新情報はHPからご覧いただけます。 <http://www.chihiro.jp/>
 TEL 0261-62-0772 FAX 0261-62-0774

●冬期休館のお知らせ

2009年12月1日から2010年2月末日まで、安曇野ちひろ美術館は冬期休館させていただきます。2010年の開館は、3月1日(月)からとなります。

●上映会 ポラニメ! ポーランド・アニメーションスタジオ〈セ・マ・フォル〉の世界

企画・制作 東京外国語大学ポーランド文化研究室 久堀由衣
 上映作品:「りゅうのバルナバ」(1977年)、「タンゴ」(1980年)ほか

1947年に設立され、現在に至るまで、パペット・アニメーションを中心に数多くの優れた作品を世に送り出してきた、スタジオ〈セ・マ・フォル〉の短編作品を、解説・字幕つきで上映します。
 ※DVDでの上映となります。

- 日時: 11月7日(土) 13:00~
- 会場: 多目的ギャラリー
- 参加自由、無料(入館料のみ)。

●10月31日(土)~11月3日(火・祝) 安曇野スタイル2009

唐木さち 安曇野 深秋を生ける—信州の作家とともに
 参加作家: 奈良千秋、平林昇、吉田佳道、杉島大樹ほか

「安曇野の魅力を全国に発信したい」という思いで始まった安曇野スタイルは、今秋で5回目を迎えます。当館では、唐木さち氏による秋の野の花のしつらえとともに、信州の作家たちの作品を展示・販売します。

- ※10月31日、11月1日にはお茶席や唐木さち氏の解説も予定しています。
- 詳細はお問合わせください。



●原語で楽しむおはなしの会

ポーランドの絵本を、原語の持つ響きの楽しさと、日本語の訳とともに味わいます。

- 日時: 11月7日(土) 15:30~
- 会場: 展示室4
- 参加自由、無料(入館料のみ)。



「しずくのぼうけん」(福音館書店)

●秋の夜長の安曇野寄席

秋の夜のひととき、日中とは少し違う雰囲気的美術館で落語をお楽しみください。

- 日時: 10月18日(日) 開場18:00~/開演18:30~
- 出演: 遊興亭福し満、三遊亭時松
- 定員: 80名 ※定員になり次第締切
- 要申込み、無料。 ※館内を見学する場合は、要入館料。

●新商品紹介

ちひろA5クリアファイル

「CHIHIRO」のアルファベットをモチーフにした、ポップな色づかいのA5サイズのクリアファイルです。全5種類、各357円(税込)。



アートプリント

原画の雰囲気をより楽しめる、高品質のアートプリント。「ぶどうを持つ少女」「赤い毛糸帽の少女」などの代表作のほか、「ゆりかごで眠るあかちゃん」など、原画が存在しない幻の作品も。

マット付、全14種類。各2310円(税込)。



●3施設共通チケット 販売開始

国営アルプスあづみの公園(大町・松川地区)の開館を記念し、安曇野ちひろ美術館(またはちひろ美術館・東京)・国営アルプスあづみの公園・天然ラドン温泉すずむし荘の3施設共通チケットの販売が始まりました。安曇野の自然・アート・温泉を、たっぷりとお楽しみください。

- 有効期限: 2010年3月31日まで
- 販売価格: 1300円(税込) ※400円分お得です。
- ※安曇野ちひろ美術館、ちひろ美術館・東京でお取り扱いしております。

●2010年 いわさきちひろカレンダー

平和と核兵器廃絶を願って制作される、恒例のちひろカレンダー2010年度版が発売になりました。

- 販売価格: 1470円(税込)
- 表紙: 白いマフラーをした緑の帽子の少女
- 1-2月: 赤い手袋の少女
- 3-4月: 身体測定
- 5-6月: 垣根ごしにのぞく子ども
- 7-8月: 貝がらと赤い帽子の少女
- 9-10月: 風船とまい上がる少年
- 11-12月: 赤い花を持つ少女



●他館での展示スケジュール

- 刈谷市美術館(愛知) 9月19日(土)~10月25日(日)
- 「わたしが選んだ いわさきちひろ展」
- 問い合わせ TEL.0566-23-1636

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日 11:00~
 絵本の読み聞かせや素話を、親子でお楽しみいただけます(自由参加)。

●絵本相談室

毎月第2・4土曜日 11:30~
 絵本に関する相談や絵本選びのアドバイス等、絵本に関するお問合わせを承ります(自由参加)。

●ギャラリートーク

展示室にて、作品の解説や展示の見どころ、絵の楽しみ方などをお話します(自由参加)。
 毎月第2・4土曜日
 14:00~ちひろ展/14:30~世界の絵本画家展

CONTENTS

〈展示紹介〉ちひろとちひろが愛した画家たち/〈企画展〉日本・ポーランド国交樹立90周年記念 ポーランドの絵本原画展…②③
 〈活動報告〉アンドレア・ベトルリック・フセノヴィッチ「自作絵本を語る」/韓国絵本画家 松川村・安曇野ちひろ美術館訪問/
 「私がいらいだいわさきちひろ展」…④ ちひろを訪ねる旅③/ひとことふたことみこと/美術館日記…⑤

美術館だより No.58 発行2009年9月9日